朗読GEN
第4回
定期公演

山月記 中島 敦

外科室 泉 鏡花

五郎八航空 筒井 康隆

2006年
7月15日(土) 18時開演
7月16日(日) 13時開演
シアトリカル應典院

朗読GENの活動紹介

2005年
7月　第3回定期公演、妹尾 河童「少年H」
　　山川 方夫「夏の葬列」
12月　関西短期大学図書館協議会研修会
　　山頭火「行乞記」
　　山尾 三省 詩「火を焚きなさい」
12月　中央公会堂、クリスマス発表会
　　江國 香織「桃子」

2006年
3月　師・姉川 明子追悼公演
　　平岩 弓枝「鬼盗夜ばなし」
7月　第4回定期公演
　　中島　敦「山月記」
　　泉　鏡花「外科室」
　　筒井 康隆「五郎八航空」

今後の予定
10月　大阪市立城北市民学習センター
11月　梅花高校にて公演
12月　枚方、中宮サロンにて公演
　演目は未定

朗読GENに入って一緒に朗読を学びませんか！

全くの初心者も、少し習ったのでもう少し深めてみたいと思っておられる方も、ぜひ一度見学に来てください。きっと楽しさがわかります。
朗読劇の舞台に立ちたい方も、スタッフとして活躍して下さる方も歓迎します。

お問い合わせは・・・・・
秋山（TEL＆FAX 0742-48-8688）
または 辻本（yumi-sab@hcc6.bai.ne.jp）

キャスト

山月記

李徴……垣内　浩子
袁傪……田中　章恵
供の者……太田　淑子
　　木村　幸子
語り……清水　光恵
　　辻本　由美
　　秋山　多佳

外科室

医学士・高峰……田中　章恵
貴船伯爵夫人……辻本　由美
画師・予……秋山　多佳
伯爵……垣内　浩子
勝元・綾……清水　光恵
公爵……太田　淑子
看護婦……木村　幸子

五郎八航空

オレ……辻本　由美
旗山……田中　章恵
お米……秋山　多佳
眼やに……垣内　浩子
赤鼻……清水　光恵
語り……太田　淑子
　　木村　幸子

スタッフ

構成・演出／秋山　多佳
舞台監督／佐野　泰広
照　　明／豊田　真也
音　　響／西角　秀紀
衣　　装／垣内　浩子
　　清水　光恵
制　　作／うら　きみこ
イラストデザイン／桂　瑞子
記　　録／小島　知光

ごあいさつ

演出 秋山 多佳

朗読ＧＥＮもようやく４年目を迎えることができました。これもひとえにご支援下さる方々のお蔭と心より感謝申し上げております。

また、今年３月には師・姉川明子追悼公演に出演することができました。師の恩に報いるべくこれからも研鑽に勤み、巾広い演目に挑戦していこうと意気込んだ結果、大変難しい素材を選んでしまい、稽古が進むほどに悩みが増し、七転八倒の日々でした。漢文調の「山月記」、古い関東弁や意味がわからず古語辞典を思わず引いてしまう言葉が多々ある「外科室」、現在の私たちには、馴染みのない言葉をどう表現するか苦闘しました。しかし、たとえ意味がはっきりと理解できなくても言葉そのものを楽しむということもできるのではないかという思いも徐々に生まれ、文章の持つリズムや流れを壊さず、音としての言葉の美しさを大切に語りたいと思った次第です。

また、「五郎八航空」は私達が初めて取り組むブラックユーモア溢れる短編小説です。この猛毒が皆様を直撃するような舞台になればうれしいのですが‥‥

正常と狂気は紙一重にあることを改めて感じさせてくれた「不思議・ふしぎ・フシギの物語」。どうか皆様、しばし現実から飛び立ってこちらの世界にお越し下さい。

朗読ＧＥＮ一同心よりお待ち申しあげております。

山月記

あらすじ

隴西（中国甘粛省地名）の李徴は博学にして秀才、若いうちに官吏登用試験に合格、ついで江南の警察事務を担当する役人となったが、自意識が強く、他人と容易に協調しない性格ですぐに官を退いてしまった。詩人となって名を死後百年に残そうとしたのである。しかし、文名は容易に上がらず生活は苦しくなる一方だった。そのため数年の後、妻子のために地方官吏となったが、一年後公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時遂に発狂した。ある夜半、急に闇の中に駆け出し二度と戻ってこなかった。その後李徴を知るものは誰もなかった。

翌年、監察御史（地方官の業務を監督、指導した）袁傪という者が嶺南に行った時、草むらの中から躍り出た人食い虎に出会う。それはかつての親しい友李徴であった。驚き恐れる袁傪に李徴は虎になってしまったわけを話した。人を避け、師に就いたり詩友と交わって切磋琢磨に努めたりしなかったのは臆病な自尊心と、尊大な羞恥心のせいであると。自分自身の才能を信じ切れなかったにも関わらず、かといって努力もせず、自分の乏しい才能の上に胡坐をかいていた自分を今は情けなく思っていることを。そしてかって住んでいた虢略にいる妻子のことを袁傪に頼んだ李徴は、帰途決してこの道を通らないでほしいと願うのである。

人狂疾成
災患相仍不可逃
今日爪牙誰敢敵
当時声跡共相高
我為異物蓬茅下
君已乘軺気勢豪
人夕溪山対明月

作品解説

この小説は、中国唐代の伝奇小説「人虎伝」に素材を仰いだものである。原本はただの怪異譚であるが、この小説では心を狂わせてまで詩を作ることに熱中した男が虎と化してもなお自分の詩業の一部なりとも後代に伝えないでは死んでも死に切れないと思う哀しい物語になっている。戦時中、パラオ島赴任の際に深田久彌に託した原稿の中から『山月記』、『文字禍』が「文学界」一九四二年二月号に掲載され、これが文壇デビュー作となった。

この小説について深田久彌は「歴史上の人物を借りて、自分の胸に溢れる情熱や感情を、精一杯に、切ない位に、吐露している」と評している。また、「李徴は中島で袁傪は氷上さんだ。」と敦の妻に言われたことを、一高以来の友人氷上英廣が書いている。

中島敦（一九〇九～一九四二）

東京に生まれる。東京帝国大学国文科卒。横浜高女で教壇に立つ。持病の喘息と闘いながら習作を重ね一九三四年「虎狩」が雑誌の新人特集号の佳作に入る。一九四一年南洋庁国語教科書編集書記としてパラオに赴任中「山月記」を収めた『古譚』を刊行。次いで「光と風と夢」が芥川賞候補となった。一九四二年、南洋庁を辞し、創作に専念しようとしたが、急逝。享年三十三才。彼は幼時よりの漢学の素養と広範な読書から得た独自の近代的な憂愁を加味して、知識人の宿命、孤独を描いた。彼の作家生活は太平洋戦争に重なり、不幸にも疑惑と恐怖に陥った自我は、古い伝記物語に着想しながらも芸術の高貴性を表した作品を生んだのである。

山月記の一口メモ

李徴がめざした進士の試験は、毎年一度行われ、商人、犯罪人、奴隷の子弟以外の国士監の各学校、州学、県学、私塾の学生は皆受験できた。進士科は最も重要で、また最も難しく、毎年わずか30人前後しか採用がなかった。これは受験生の約1～2％である。試験に合格すればトントン拍子に出世でき、一族郎党が食べていけたとのことである。
多くの読書人が苦労して勉強したのは、いつの日か進士に及第するためである。しかし、身分の低い場合は出世は遅かったようである。
また、唐の時代は古典詩歌の最盛期であった。今に伝わる詩歌は、5万首近くあり、今日でも人々に愛されている。李白、杜甫、白居易など有名な詩人を多く輩出している。李徴はきっとこのような詩人と肩を並べるような存在を目指していたのだろう。

作中語られる李徴の詩

たまたま狂疾によって殊類と成る
災患相よって逃がるべからず
今日の爪牙誰かあえて敵せん
当時の声跡　共に相高し
我は異物となり蓬茅のもと
君はすでに軺に乗りて気勢豪なり
この夕べ渓山明月に対し
長嘯を成さずただ嗥を成す

その詩を訳してみれば…

ふとしたきっかけから、狂気に冒され、獣の身となってしまった。災難が重なり、不幸な運命から逃れることができない。

いまや人食い虎となった私の鋭い爪や牙にいったい誰が敵対できるだろう。思えばあの頃は私も君も秀才の誉れが名実ともに高かった。

しかし、いまでは私は獣の身となって、草むらに寝起きしているが、君はすでに高官になって軺（官吏の乗用車）に乗って、まことに意気盛んである。（旧友と再会した）今夜、渓や山を照らす明月に向かって（この苦しみを訴えようと）声をあげて詩を吟じようとしても、人ならぬ獣の身としては、口から洩れるのはただ、ぶざまな吼え声だけである。

外科室

貴船伯爵夫人が東京府下の病院で心に秘めた想い人医学士高峰の執刀で手術を受けることになる九年前に二人の出会いはあった。ところは小石川植物園、時は五月五日、躑躅の花の満開の折、高峰とその友人、画師の予とが散策しているとき、美しく貴き三人の夫人らと行き違う。思わず振り返る高峰は「真の美の人を動かすことあの通りさ」と感嘆するのである。その後九年を経て、病院での手術の日まで高峰は婦人のことについて一言も語らなかったが、その間結婚もせず、その上学生時代より品行いっそう謹厳であった。予が手術の行われる外科室に到着したとき室内には夫の伯爵ほか人々が心配そうに見守っていた。その日執刀するのは他ならぬ高峰であったが、手術台に横たわる夫人は断固として麻酔剤を飲まないと言う。夫の説得もはねのけた夫人は、ついに……

泉鏡花（一八七三～一九三九）

金沢生まれ。尾崎紅葉に憧れ、作家を志し上京。放浪生活の後、紅葉門下となって小説の執筆を始める。作品は「高野聖」「草迷宮」など耽美的なものが多く、自然主義の流れとは異なる独自の世界を作り上げている。また、「婦系図」「歌行燈」など風俗小説でも人気を博した。『外科室』は初期の短編で、明治二十八年「文芸倶楽部」に発表された。

五郎八航空

雑誌編集者のオレと、カメラマンの旗山は無人島探訪企画のため乳島に向かっている。台風が近づいてきたため帰れなくなった彼らは山の中腹にあった掘っ立て小屋にいた二人の農夫が乗る塩川航空の飛行機に乗せてもらって帰ろうとする。さて二人は無事帰れるだろうか……

筒井康隆（一九三四年～）

大阪市生まれ。同志社大卒。一九六〇年弟三人とSF同人誌〈NULL〉創刊。この雑誌が江戸川乱歩に認められる。一九八一年、「虚人たち」で泉鏡花文学賞、八七年「夢の木坂分岐点」で谷崎潤一郎賞、八九年「ヨッパ谷への降下」で川端康成文学賞、九二年「朝のガスパール」で日本SF大賞を受賞、九六年十二月、三年三ヶ月に及んだ断筆を解除。二〇〇〇年「私のグランパ」で読売文学賞を受賞。